354 甲状腺腫瘍のTl-201シンチグラフィの経時的定量評価の有用性について

横沢 保，宮川 信，千賀 脩，小林 克，金子源吾，菅谷 昭，飯田 太，矢野今朝人，平野浩志（信州大医 2外，中放）

甲状腺腫瘍のTl-201シンチグラフィの客観的評価法の1つとして，上縦隔に対する腫瘍のTl-201カウント比をデジタル処理する事により，Tl-201静注後5分，60分，120分にそれぞれ甲状腺mapを作製したところ，従来のシンチグラフィに比し有用であったので報告する。

対象は，コロイド腺腫9例，索状腺腫4例，菅状腺腫3例，乳頭癌10例（縦隔リンパ節転移4例を含む。）濾胞癌5例，慢性甲状腺炎4例，腺腫様甲状腺腫5例の40例である。

甲状腺腫瘍に対する線量分布図は，0.5㎠あたりのコリメータのカウント数をもとに甲状腺mapとして表示した。

甲状腺mapの有用点は，1. delayed phaseのTl-201の摂取量，摂取率が客観化される。2. 組織型の異なる複数結節症例の術前の組織診断が摂取パターンの分析により予想し得る。3. 摂取率の高い縦隔内リンパ節転移像の推測が可能。4. 腺腫様甲状腺腫は，摂取パターンにより2つに核医学的見地からの分類が可能である。

355 甲状腺腫瘍における^{201}Tℓ Cℓ delayed scan，超音波検査，CT検査の比較検討

沢 久，佐崎 章，岡村光英，浜田国雄，越智宏暢，小野山靖人（大阪市大 放）

われわれは甲状腺腫瘍の診断にタリウムシンチグラフィ，特にdelayed scanの有用性を報告してきた。今回は甲状腺腫瘍の診断に^{201}Tℓ Cℓによるdelayed scan，超音波検査（USG），X線CT検査を併用し，各画像診断法の長所・弱点について検討した。対象は手術により病理組織学的診断の確定した220例であり，そのうちdelayed scanとUSGとを併用した症例は120例，3検査の全てを施行した症例は28例である。

delayed scanの甲状腺癌に対するsensitivityは83.1%，specificityは90.2%であった。USGのsensitivityは69.1%，specificityは80.0%であった。また，delayed scanとUSGの併用ではsensitivity 92.7%，specificity 73.8%であり，両者の併用が甲状腺癌の診断に有用と思われた。CT検査は甲状腺癌の正診率の向上に対する寄与は少なかったが，腫瘍の広がりや娘結節の検出に有用と思われた。

356 分化型甲状腺癌の転移の検出法

ー血清サイログロブリン測定、TL－201シンチ、I－131シンチの意義ー

日下部きよ子、川崎幸子、井上豊、西岡隆文、牧正子、奈良成子、広江道昭（東女医放）粟原重子
出村博（同、ラジオアッセイ）橋本吉秀（同、内分泌外）
山崎統四郎（放医研）

甲状腺全摘術がされている分化型甲状腺癌49例について血清サイログロブリン（Tg）測定、TL－201シンチそしてI－131シンチを施行し、甲状腺癌転移の診断能に関する価値を検討した。Tg値は、転移無し群（15例）で7．8±10．2ng／ml となった。リンパ節転移群（5例）、骨転移群（8例）肺転移群（10例）、骨および肺転移（11例）の Tg値はそれぞれ57．0±52．6、6326．8±14338．6、611．1±560．3、7290．9±8452．5ng／mlとなり、いずれも甲状腺機能低下状態で上昇した。TL－201シンチのSENSITIVITYは83．3％で病理組織像による差はみられなかった。 I－131シンチのSENSITIVITYは、濾胞腺癌の89．5％に対し乳頭腺癌で28．6％と低く、全体の正診率は75．5％とTL－201シンチの85．7％に比し低かった。Tgの測定（特に甲状腺機能低下時）は全摘術を施行した甲状腺癌の転移を検出する上に感度が高く、TL－201シンチとI－131シンチを補う秀れた検査法であると考えられた。

357 抗サイログロブリン抗体を用いた甲状腺癌の抗体シンチの検討

平湯秀司、和泉元衛、太田和博、山下俊一
佐藤賢士、森田茂樹、長瀧重信（長崎大一内）
計屋慧實、藤本 進、本保善一郎（同大，放）

前回の本総会で，抗サイログロブリン抗体（抗Tg抗体）を用いた甲状腺がん抗体シンチの基礎的ならびに臨床的検討を発表した。今回は放射性ヨード標識抗Tg抗体の腫瘍内分布と，腫瘍集積の特異性について検討した。

抗Tg抗体は抗体価の高い橋本病患者血清から，ゲル沪過と，affinity chromatographyで作製した。放射性ヨード標識はlactoperoxidase, glucose, glucose－oxidase systemで行なった。放射性ヨード標識抗Tg抗体を甲状腺癌移殖ヌードマウス，または，甲状腺癌患者に静注後，腫瘍を剔出，ホモジネート後，核，ミトコンドリア，マイクロゾーム，サイトゾールに分画し，各分画の放射活性を測定した。さらにTg－抗Tg抗体免疫複合体はaffinity chromatographyで検索した。正常者IgGを，抗Tg抗体の代りに用いて同様の検討を行なった。

放射活性は，おもにサイドゾール内に検出され，Tg－抗Tg抗体の免疫複合体であった。放射性ヨード標識正常者IgGは腫瘍内にとりこまれなかった。

放射性ヨード標識抗Tg抗体は腫瘍細胞内にとり込まれ，臨床的に甲状腺癌の診断に有用である。

Presented by Medical*Online